

National Institute for Defense Studies



Insights for Peace, Security and the Future...



防衛省防衛研究所 研究職職員業務説明パンフレット

2023年3月発行（2024年3月一部更新） 編集・発行 防衛省防衛研究所

〒162-8808 東京都新宿区市谷本村町5-1

防衛省防衛研究所 企画部総務課人事第1係

電話:03-3268-3111(代表) 内線29141 電子メール:nids-jinji@ext.nids.mod.go.jp

www.nids.mod.go.jp

検索

YouTubeは
こちらから



ツイッターは
こちらから



フェイスブックは
こちらから



防衛研究所

研究職職員業務説明パンフレット



NIDS
Tokyo Japan

日本唯一の防衛・安全保障分野の 国立研究所である防衛研究所。 そこで働く研究者の仕事とは？

本パンフレットは、防衛研究所（防研）の研究者（研究職職員）になりたいと考えている方、防研の研究者が普段どのような活動をしているのか興味があるという方に、研究者の仕事やその魅力、キャリアパスなどについて紹介するものです。本パンフレットを通じて、少しでも防研の仕事と研究者の役割について理解が深まれば幸いです。

※本パンフレットに登場する研究者の肩書は、令和5年2月時点のものです。

防研では、約60名の研究者が働いています。自衛官を含めると研究活動に従事する職員は約90名となり、防衛・安全保障分野の研究機関としては国内最大規模を誇ります。

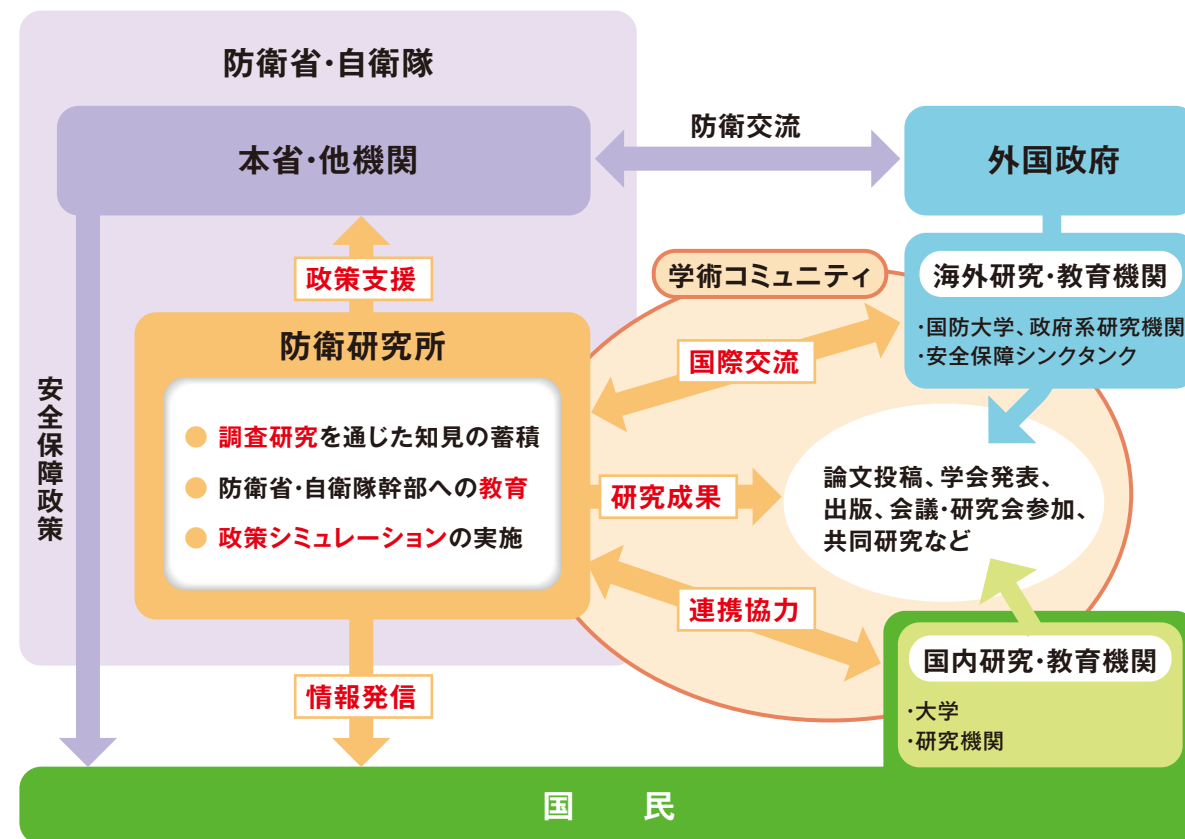
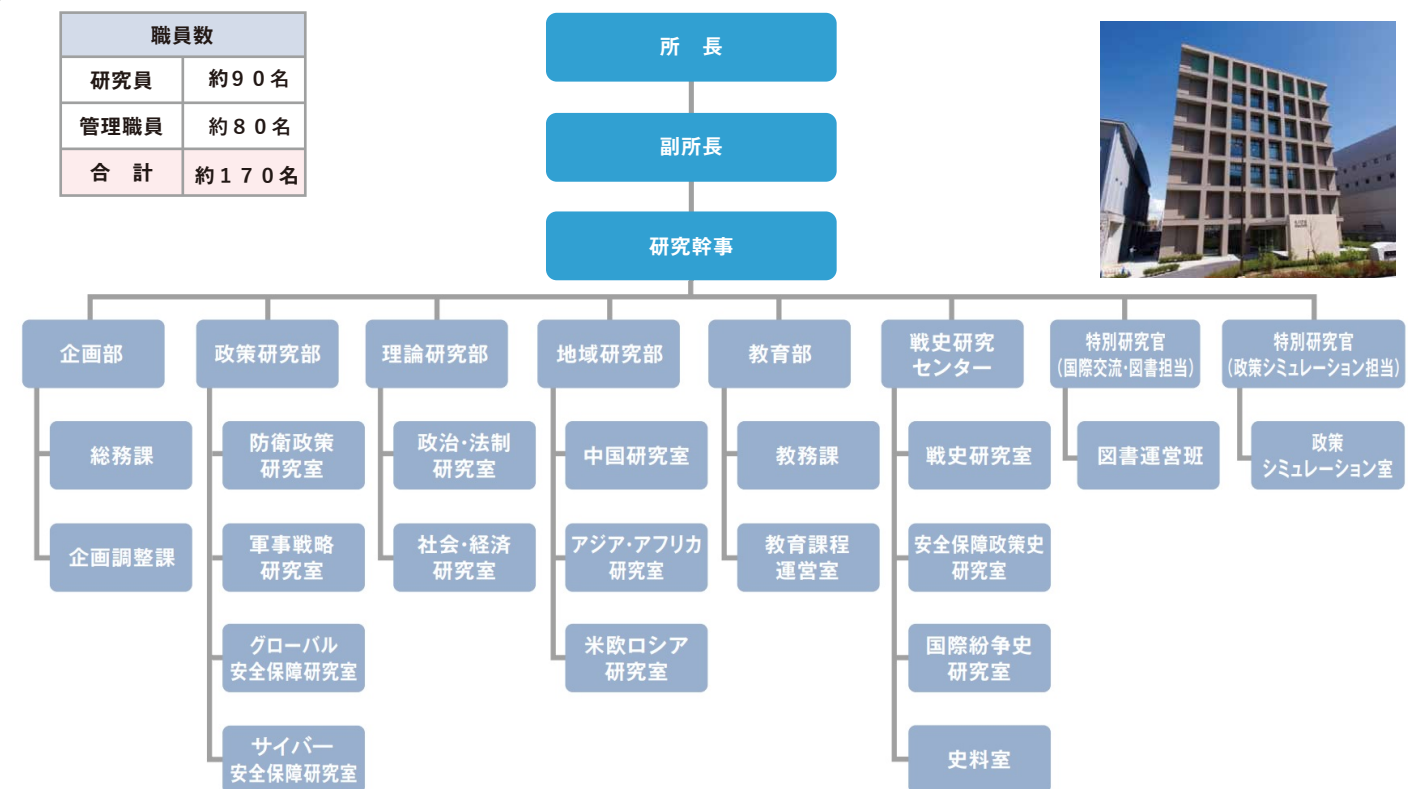
研究者は政策研究部、理論研究部、地域研究部、戦史研究センターの下にあるいずれかの研究室に所属し、様々な業務に従事します。個人や室単位の業務に加え、内容に応じて部・室を横断したプロジェクトチームでの業務も多く、研究者間の交流が盛んです。

代表的な業務には、①調査研究、②教育、③国際交流、④政策シミュレーション、⑤研究成果の発信、などがあります。これらを通じ、防衛省のシンクタンクや諸外国でいう国防大学に相当する機能を果たすとともに、防衛・安全保障分野の研究の発展に貢献し、その成果や知見を広く社会・国民に還元しています。

目次

- | | |
|-----------------------------|--------------------------------------|
| 01 調査研究.....03 | 06 キャリアパス・留学・
在外研究.....09 |
| 02 教育.....05 | 07 研究者の日常.....11 |
| 03 国際交流.....06 | 08 勤務条件・
ワークライフバランス.....13 |
| 04 政策シミュレーション.....07 | 09 若手研究者からの
メッセージ.....15 |
| 05 研究成果の活用・発信.....08 | 10 よくある質問.....18 |

令和6年3月現在



01 調査研究

防研の研究者にとって最も重要な仕事は、自らの専門的な知見に基づいて行う調査研究です。防研での研究は、基本的に公開情報に基づいて行われています。所内には研究図書室があり、約20万3千冊の専門書や学術誌などを所蔵しています。論文やメディア記事など各種のデータベースも契約しており、研究者はこれらの文献やデータベースを活用しながら日々の研究を行っています。さらに防研は膨大な旧日本陸・海軍関係の史料を所蔵・管理しています。防研の研究者であればこうした史資料へのアクセスも容易です。

各研究者が行う調査研究には、いくつかの種類があります。調査研究の目的や内容に応じて、国内外へ出張の機会が与えられることもあります。研究者は防衛省の一員として、また一人の研究者として、研究機会や研究資源の充実に取り組んでいます。

年次研究（特別研究／基礎研究・所指定研究）

各研究者は毎年、特別研究、基礎研究、所指定研究のいずれかを実施します。これらの研究を積み重ね、全ての活動の基盤である自らの学問的基礎を強化しています。

特別研究は、日本の防衛・安全保障政策上のニーズに応えることを目的とし、防衛省の政策部門からの要望を受けて実施します。研究成果は防衛省の政策立案に活用されています。テーマやスケジュールに応じて単独の研究者が担当するケースもあれば、複数の研究者がチームを組んで共同研究するケースもあります。

基礎研究は、研究者が各自の専門性と発意に基づき、比較的長期の視点から重要と思われる防衛・安全保障のテーマを選んで研究します。基礎研究の中で特に日本の防衛政策に寄与できると認められたものは、所指定研究となります。

刊行プロジェクトや国際共同研究プロジェクトのための調査研究

所の主要刊行物の執筆者となった研究者は、原稿執筆のための調査研究を行います。多くの場合、複数の研究者がチームを組み共同で執筆します。また、防研と外国の研究機関とで共同研究プロジェクトを行うこともあります。研究者は日本側メンバーとして参加し、外国の研究者との研究会を開催し、共同の報告書・論文集を執筆します。

独自のイニシアティブに基づく調査研究

所の業務として行われる調査研究に加えて、各研究者は独自の調査研究も行います。独自の調査研究を通じた個々の研究者の研究能力の向上は組織的業務に裨益するほか、より多くの知見を社会・国民に還元する観点からも重要であり、推奨されています。

令和3年8月に防研は文部科学大臣から科学研究費補助金取扱規程に規定する研究機関として指定を受け、防研の研究者が科研費に応募できるようになりました。これにより、所外の大学・研究機関の研究者との共同研究を進めやすくなりました。

これらの調査研究では、軍事戦略、諸外国の防衛・安全保障政策、安全保障理論、地域情勢、戦史など、防衛・安全保障分野に関わる幅広いテーマを取り上げています。具体的なテーマや内容については、年次研究が多く投稿されている『安全保障戦略研究』、『東アジア戦略概観』や『中国安全保障レポート』などの刊行物、防研ウェブサイトの研究者紹介ページをご覧ください（研究成果の発信については8ページ参照）。



研究図書室

あさみ あさき
浅見 明咲

地域研究部アジア・アフリカ研究室研究員

私は朝鮮半島の安全保障を専門とし、最近では北朝鮮の軍事態勢、米韓同盟、米朝関係等の研究に取り組んでいます。防研では、自身の研究成果を様々な形で発信する機会があります。例としては、北朝鮮の軍事態勢に関する基礎研究を行い、それをもとに所主催のブラウンバッグセミナーで、研究成果を発表しました。発表を通してご指摘いただいた部分を再考し、『安全保障戦略研究』の研究ノートとしても掲載をしております。また、年間を通して行う研究とは別途、NIDSコメンタリーやブリーフィング・メモなどを通して、時宜に合った情報発信も行っています。スピード感のある情報発信と学術的な考察を交えながら、研究者としてのアウトプットの質を高めていくことを目指しています。防研では、先輩研究者が様々な形で内外への情報発信を行っており、非常に刺激になる環境です。また、安全保障に関する多様な研究者がいるなかで、専門性を高めていけることが防研の強みであると感じています。

専門：朝鮮半島の安全保障



すぎうら やすゆき
杉浦 康之

地域研究部中国研究室主任研究官

私は、主に中国政治外交史や中国の国防政策を研究しています。防研が毎年発行する『中国安全保障レポート』は、中長期的な観点から中国の軍事戦略や安全保障に係る重要なイシューを取り上げますが、2022年度版（2021年11月公刊）では、人民解放軍の統合作戦能力について学術的な議論を踏まえながら政策的な意義についての分析を示しました。こうした成果物は、国内外の学者、政策担当者、国防当局者、メディア関係者など幅広い人々と日頃から付き合い、深く知的な学術的な議論と政策に携わる緊張感の双方に触れることができる防衛研究所の研究者だからこそ提供できるものだと思います。

専門：現代中国政治外交史、
中国の国防政策



02 教育

諸外国でいう国防大学に相当する防研は、幹部自衛官および防衛省や他省庁の幹部職員などに対する教育を行っています。主な教育・研修課程には以下のものがあり、研究者は講義などを担当しています。

一般課程

一般課程は1佐・2佐級の自衛官、同等の防衛省・他省庁職員、民間企業からの研修員や海外軍人の留学生約40名を対象とする約10カ月間の教育課程です。一般課程を修了した自衛官は、各幕僚長をはじめ自衛隊の重要なポストに就いてきました。

研究者は講座（講義形式のクラス）やセミナーの担当教官として、シラバスの作成から講座・セミナーの実施までを担います。基本的に主任研究官以上の研究者（研究者のキャリアパスについては9ページ参照）が主担当となり、年間1～3個の講座・セミナーを受け持ちます。また、課程の終盤に各研修員は論文を提出することになっており、研究者は論文のテーマに応じて指導教官を務めます。

2016年9月からは、政策研究大学院大学と連携し、研修員の一部に対して修士号を付与する戦略研究プログラムを実施しています。これに伴い、講座やセミナーを担当する研究者が同大学の連携講師を委嘱されています。



講義の様相

特別課程

特別課程は将補・1佐級の自衛官、防衛省・他省庁・地方公共団体の課長級職員、民間企業からの研修員を対象とする約3週間の教育課程です。特別課程の講義は、主に研究室長以上の研究者が受け持ちます。

総合職研修

入省3年目の防衛省総合職職員を対象として行われる短期間の研修です。総合職研修の講義は主に研究員や主任研究官が受け持ちます。

上記のいずれの教育課程も、将来を担う実務のリーダーに学術的知見をインプットする重要な機会であるだけに、どのようなコンテンツを提供すべきか真剣に考える必要があります。このほかにも、防研の研究者が防衛省内の他機関で行われる研修に講師として派遣されることもあります。研究者は自らの専門的知見を活用したこれらの教育を通じて、幅広い視野と豊富な知識に基づき政策形成を行う人材の育成に貢献しています。

また、手続きと承認を経て、大学で非常勤講師を務める研究者もいます。こうした活動も、社会・国民への知見の還元につながっています。

03 国際交流

防研は、海外の国防大学や研究機関との間で国際的なネットワークを構築しており、研究者は恒常的にこれらの交流先との意見交換や国際会議への参加を行っています。「国際交流」と所内で呼ばれるこれらの活動は、防衛省・自衛隊が実施する各国との対話・交流の一環として、日本と各国との相互理解や信頼醸成の促進の一翼を担っています。研究者にとっては、各国の最新の問題意識や情勢認識、研究成果に触れる機会となり、そうした知見・経験を調査研究に活かせるほか、人的ネットワーキングという意味でも有益です。近年のパンデミックは国際交流に大きな影響を与えていますが、オンライン会議システムを活用することで、対面での交流に劣らず活発に交流を続けています。

2国間交流

外国の安全保障・国防研究機関との間の相互訪問と研究会の開催や、外国の国防大学との間の教官の相互派遣と講義の実施が定期的に行われています。研究者はこうした交流での研究発表・講義に加え、招へい・出張の調整も担います。交流先はアメリカ、中国、ロシア、韓国、オーストラリア、インド、東南アジア、欧州、中東、アフリカなど幅広い国・地域の40機関以上に上ります。

国際会議への参加

防研あるいは研究者個人に招待が届き、研究者が国際会議に参加することもあります。参加実績がある国際会議には、ARF国防大学校長等会議、NATO国防大学国防関係学校長会議、IISSアジア安全保障会議（シャングリラ会合）、ハリファックス国際安全保障フォーラム、香山フォーラム、モスクワ国際安全保障会議、ホンルンフォーラムなどがあります（防研が主催する国際会議については8ページ参照）。

その他の交流

海外の様々な国から政府要人、国防省・軍幹部、国防大学研修団、大学・研究機関研究者が防研を訪れます。研究者は日常的にこれらの来訪者との懇談・意見交換を行っています。



欧州交流で訪問したフィンランド国際問題研究所（FIIA）での意見交換



米国防大学国家戦略研究所（INSS）、韓国国防研究院（KIDA）と開催した日米韓3極戦略対話

04 政策シミュレーション

2015年4月、防衛省本省などに対する政策支援手段の充実・強化の一環として、特別研究官（政策シミュレーション担当）およびその下に政策シミュレーション室が設置されました。政策シミュレーション室には研究者・自衛官・事務官が所属し、政策シミュレーションの企画・運営を行っています。

政策シミュレーションとは

政策シミュレーションとは、仮想的な状況下において各国政府機関などのアクターがどのように行動するかを参加者の間で模擬（シミュレート）するものです。シミュレーションを通じて、日本やその同盟・パートナー国が現実の状況において効果的な決定、協力、問題解決を行う際に課題となる点を明らかにすることができます。また、政策策定・決定者が政策シミュレーションに実際に参加することで、今後起こりうる事態や問題について認識できるという効果も期待されます。

シミュレーションの手法は、特に米国において大きく発展し、国防・外交当局の政策策定の現場に広く取り入れられています。自衛隊においては、これまで特に戦術・作戦レベルのシミュレーションが行われてきました。防研では、戦略レベルのシミュレーションを中心に組み込んでおり、防衛省の政策立案に関する支援と、防研が開講する一般課程などの教育の2つの場面において活用されています。

政策シミュレーションにおける研究者の役割

研究者はシミュレーションで用いるシナリオの作成、参加者間の討議の進行、報告書の作成などを担当します。シミュレーションのテーマ、目的、手法は多様なため、政策・地域・理論・歴史の各分野の研究成果を総合的に活用することが必須であり、政策シミュレーション室に所属していない研究者も必要に応じて協力しています。

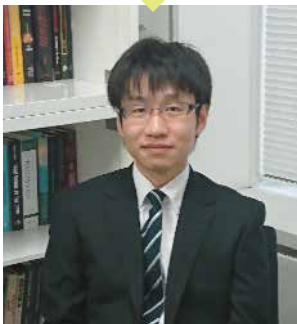


防研で開催された政策シミュレーションに関する国際会議の様相

くりた まさひろ 栗田 真広 政策シミュレーション室主任研究官

政策シミュレーションの技法は、日本では比較的馴染みが浅いものの、米英などでは外交・安全保障分野の政策コミュニティにおいて広く用いられてきたもので、英語ではウォーゲーミングと呼ばれています。現実には起こり得る特定の状況について、実際に人間が参加して関連アクターの意思決定をシミュレートするこの手法は、その他の視点からの客観的分析では得られない示唆を導き出す可能性を秘めており、幅広く役立ち得るものであると同時に、それ自体が方法論としてとても奥深いものです。政策シミュレーションには、政策立案において用いられる分析的なもの、実際に起こり得る特定の状況を疑似体験することで、政策決定者がそれに習熟する機会を提供する教育目的の両方がありますが、現在、防研のシミュレーション室では、主に後者のシミュレーションを実施しています。

専門：南アジアの安全保障



05 研究成果の活用・発信

防研の研究成果は、政策支援に活用されるとともに、様々な形で学術コミュニティや社会・国民に発信されています。各研究者は研究成果を上げること自体はもちろん、その活用・発信のための業務にも取り組んでいます。

刊行物

これまで刊行してきた『東アジア戦略概観』と『中国安全保障レポート』は所の主要刊行物であり、日本を取り巻く安全保障環境の理解と議論の活性化に貢献しています。ほかにも、部外の研究者にも論文投稿の機会が開かれた学術誌『安全保障戦略研究』、海外の大学・研究機関との共同研究の成果をまとめた『国際共同研究シリーズ』や、研究者が自らの分析・視点をコンパクトな形で発表する『ブリーフィング・メモ』や『NIDSコメンタリー』など、数多くの出版物を刊行しています。

研究者はこれらの刊行物の原稿の執筆はもとより、専門知識をもって編集に当たることで、学術書としての信頼性の維持向上に努めています。各刊行物は防研のウェブサイトで無料公開されており、学術コミュニティや社会・国民への知見還元の一翼を担っています。

国際会議・研究会

防研は、数多くの国際会議や研究会を主催しています。中でも最大規模のものが「安全保障国際シンポジウム」と「戦争史研究国際フォーラム」で、毎年、数百人の研究者・実務者や報道関係者、さらに一般の方が聴講に訪れます。こうした会議では、世界トップクラスの研究者による発表を聞くことができるだけでなく、防研の研究者もパネリストとして発表を行ったり、司会や討論者を務めたりしています。こうした国際会議や研究会の企画・運営の一部も研究者が担っています。

政策支援プロジェクト

防衛省の政策部門からの依頼を受け、プレゼンテーション、ブレインストーミング、勉強会を行っています。防衛省の実施する国際的な能力構築支援事業のメニューとして政策シミュレーションを活用したこともあります。このような政策部門への貢献は政策支援プロジェクトと位置付けられ、政策シンクタンクとしての防研の特徴の1つとなっています。

ブリーフィング

防研の研究者は、防衛省・自衛隊の幹部や国家安全保障局（NSS）に対して、最新の研究成果や国際情勢・地域情勢・戦史についてのブリーフィングを行うほか、その他の政府高官や国会議員などに対しても、その時々ニーズに応じたブリーフィングを行っています。

部外での発表・発信

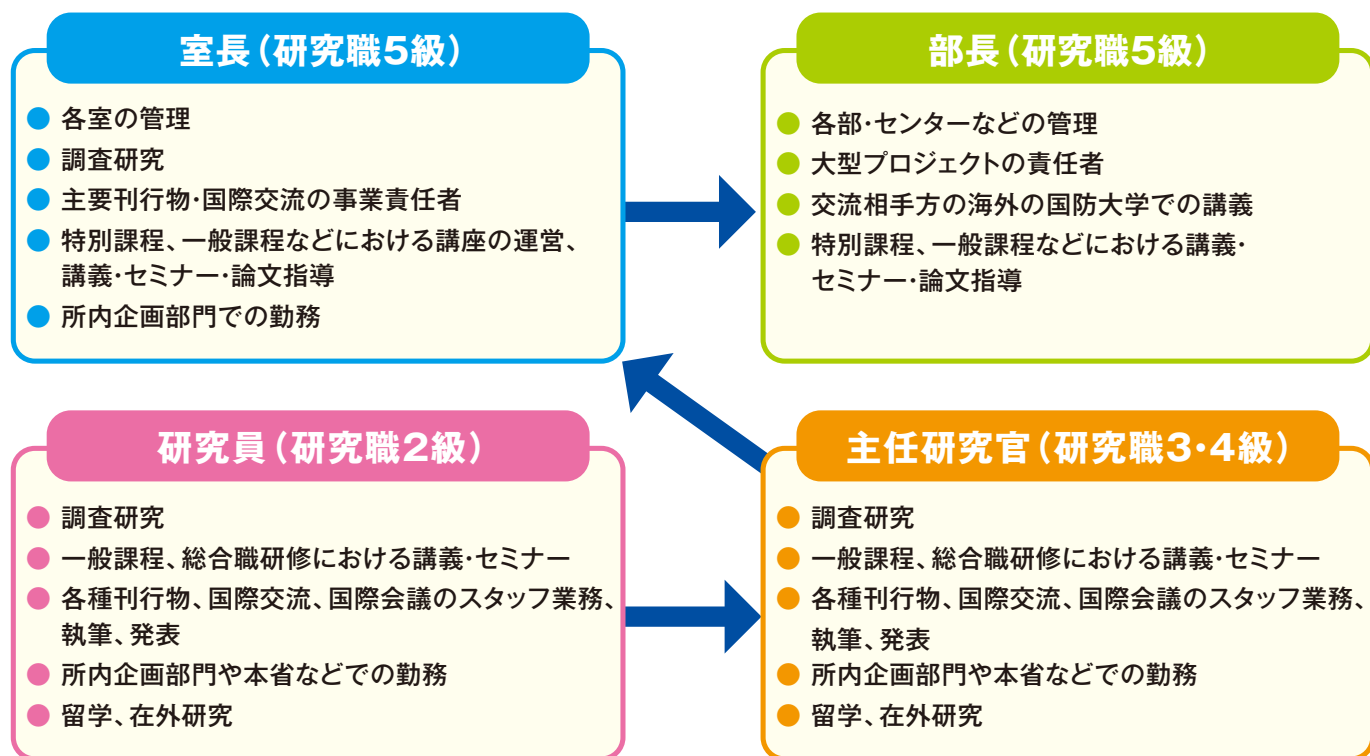
各研究者は上記以外にも、学会報告や部外の学術誌への論文投稿、学術書や一般書の執筆などを通じて、国内外で自らの知見・研究成果を意欲的に発信しています。世界各地で行われる国際会議に招待されたり、新聞・テレビなどからインタビューを受けたり寄稿を求められたりする研究者も数多くいます。

06 キャリアパス・留学・在外研究

キャリアパス

研究者は、勤続年数や勤務実績に応じて、研究員から主任研究官、研究室長、研究部長へと昇任していきます。それに伴って、担う仕事・業務の内容も変化していきます。

本パンフレットの冒頭でも述べた通り、研究者は政策・理論・地域研究部および戦史研究センターの下にあるいずれかの研究室に所属し、一部は政策シミュレーション室や他の部署で勤務しています。各プロジェクトは主に部長級あるいは室長級の研究者が責任者となって運営しています。また、研究幹事は調査研究や教育を統括する研究者のトップであり、所全体を見渡したマネジメントを行っています。



※「所内企画部門や本省などでの勤務」とは

防研の研究者は、そのキャリアパスの中で調査研究や国際交流の企画・調整を担う部署や一般課程などの教育実務を担う部署、あるいは防衛省の政策部門に一定期間勤務することがあります。こうした勤務を通じて研究者の活動と防研の組織的ニーズを架橋したり、政策部門に対して研究者の知見を提供したりしています。

留学・在外研究

調査研究・教育能力の向上や防研での業務に資する人的ネットワークの構築を促進するため、防研の研究者には、留学・在外研究の道が開かれています。

留学では、主に若手の研究者が海外の大学院（博士課程）に最長2年間在籍・滞在し、課程の履修、学位論文の執筆を行っています。機会を与えられた研究者は、自身の専門分野や防研での業務の必要性に応じて、留学先を決定しています。

在外研究では、若手・中堅の研究者が海外の大学・研究機関に最長1年間客員研究員として在籍・滞在します。このほか、2週間から1か月程度の期間で派遣される機会もあります。

また、留学・在外研究とは別に、海外機関へ出向し勤務した研究者もいます。

海外留学・在外・出向の派遣実績(2019～2023年度)

留学

- 英……セントアンドリュース大学
- 米……バージニア大学
- 加……トロント大学
- 米……ワシントン大学
- 星……南洋工科大学
- 米……プリンストン大学

在外研究

- 米……ジョージワシントン大学
- 米……東西センター
- 英……ケンブリッジ大学
- 豪……オーストラリア戦略政策研究所
- 米……カリフォルニア大学サンディエゴ校
- 米……スタンフォード大学

出向

- NATOサイバー防衛協力センター

まえだ ゆうじ
前田 祐司

政策研究部防衛政策研究室研究員

専門:国際政治理論、
アジア太平洋地域の安全保障

米国バージニア大学の政治学博士課程に在籍しています。コロナ禍の影響により1年目は東京にいながら完全リモートでコースワークを始め、2年目から現地バージニア州シャーロッツビルに移りました。米国の博士課程は方法論の訓練が充実している点が特徴的で、複雑を極める国際政治の世界における因果推論をいかに追求していくか考えさせられるとともに、博士論文の計画を練るにあたり教授陣から生のフィードバックを受けて原稿の修正を繰り返す、学びの多い日々を送っています。また、こちらで1学期だけティーチングアシスタントとして学部生の教育にも携わる機会があり、国際政治の理論と歴史、そして現在進行形のウクライナでの戦争を教材としてディスカッションの話題が尽きず、学生に教える中で自らも学ぶという実りある1学期になりました。



やつづか まさあき
八塚 正晃

地域研究部中国研究室主任研究官

専門:現代中国の政治外交・
安全保障

2022年8月から豪州政策戦略研究所(ASPI)に客員研究員として受け入れてもらい、在外研究をしています。私は中国の政治外交や新たな領域における安全保障政策を研究対象としています。ASPIは近年、中国の人民解放軍、科学技術政策、サイバーセキュリティなどの動向に関して、興味深い問題提起を行っており、国際的な注目を集めているシンクタンクです。私は、ASPIで客員研究員として在籍することで、同研究所の研究手法を学ぶとともに研究者とのネットワークを築くことを期待して赴任しました。実際にこちらで働いてみると、研究上の収穫だけでなく、研究者のバックグラウンドの多様性、共同研究を円滑に実施するための研究者間のコミュニケーション、研究成果のアウトリーチに関する工夫など、シンクタンクとしてのカルチャーの違いも身近に知ることができており、とても良い経験となっています。このように在外研究を通じて海外のシンクタンクで研究活動の機会を得ることができることも防研の一つの魅力だと思います。



07 研究者の日常

研究者の日常は、担当する業務の内容や時期によって大きく変わります。下図は、入所1～2年目の若手が過ごす1年のイメージです。

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
年次研究計画の 審査・承認		部隊研修に参加			研究会の開催	国外に出張 学会に参加	刊行物の公表	シンポジウムの開催		年次研究の提出	

春は比較的時間に余裕があることが多いので、しっかり自身の研究を進めます。自衛隊の部隊を訪問する研修に参加する機会があることも。

夏頃から国際交流事業が本格化。スタッフとして研究会の調整・運営に関わったり、発表者を務めたりします。

秋から冬にかけて会議や研究会、学会などが目白押し。刊行物の編集作業がフルスロットルで進む中で、国際交流事業の国外出張メンバーに選ばれるなど、大忙し。

年が明ければあっという間に年度末。他の業務の合間を縫ってこつこつ進めていた年次研究を完成させて提出します。

以下では3名の研究者に、過去の経験に基づいて仮想の1日をモデルとして示してもらいました。

きくち しげお
菊地 茂雄

地域研究部中国研究室長

一研究室長として携わる業務で重要と思うものはいくつかあります。第1は当然ながら自身の研究ですが、そのほかにも、新規採用された研究員の相談に乗ることも重要です。組織のニーズに応えることは当然としても、その人が長期的に、時間をかけて取り組みたいと思えるテーマを見つけることは、その後の長い研究キャリアを全うしていく上でとても大事なことです。彼らがどのようなテーマに「真実味」を感じられるか、さまざまな話をしながら、一緒に探ります。また、組織管理のための業務も欠かせません。最近でも、政策、理論、地域の3研究部に係る新規研究職ポストの増員要求の取りまとめを2年ほど担当しました。行政機関全体に対して職員の定員削減が恒常的に行われているなか、3研究部として健全性を維持し、組織の生き残りを図るためには、省の政策ニーズに合致した研究テーマを見つけ、査定当局に新規ポスト増設の必要性を訴え続けるほかありません。

専門:米国の軍事戦略、政軍関係、
国家安全保障政策決定



AM9:30 始 業	10:30 一般課程研修生と 課題研究について面談	11:30 原稿執筆	PM13:30 研究部増員 要求資料の検討	15:30 所内研究者と ディスカッション	16:30 原稿執筆 再開	18:15 終 業
●部内メールを確認、返信。管理事項への対応や、研究室内のとりまとめが必要なものについて処置。	●研修生が作成したアウトラインに基づき、論旨の展開を確認しつつ、改稿の方針についてアドバイス。	●昨日から続く原稿執筆作業を再開。先行研究、関係者の回顧録、報道、関係法令、各軍の資料をひっくり返しつつ、イメージを固めながら、少しずつ記述を進める。	●研究部増員要求チームで作成した、来年度の増員要求資料を検討。研究ニーズを明確にし、査定当局の理解を得やすい資料とすべく修正作業を続ける。	●業務調整にかこつけて、同じ米国を専門とする所内研究者に議論をもちかける。18世紀「建国の父祖」による憲法論争から、過去の戦争における米政府内の議論、最近読んだ米軍雑誌の記事にまで話題が拡散する。こうした議論のなかで論文のテーマを見付けることも多い。	●退庁までの間に極力作業を進める。	●子供の保育園や学童保育のお迎えがなくなったのでスケジュール的には楽になった。帰宅後や休日は、持ち帰った各種資料に目を通すほか、原稿作業をしていることも多い。

ふくしま やすひと
福島 康仁

政策研究部グローバル安全保障研究室主任研究官

私は宇宙政策、とりわけ宇宙安全保障に関する研究を行っています。大きな問題関心は、宇宙の軍事利用の潮流や世界的な宇宙ガバナンスのあり方といった点にあります。また、米国や中国をはじめとする主要国の安全保障分野における宇宙政策も分析しています。研究にあたっては、資料の読み込みに加えて、関係省庁や機関、企業の方々との意見交換をできる限り行うようにしています。防衛研究所ではそうした意見交換を行う機会が比較的多く、政策研究を行いやすい環境であると感じています。

専門:宇宙政策、
宇宙安全保障



AM9:30 始 業	10:00 研 究	PM12:00 昼休憩	13:00 教 育	15:15 国際シンポジウムの準備	18:15 終 業
●メールの確認。急ぎの案件については、すぐに調整を実施。気が付けばお昼になっていることも。 ●1日のスケジュールを確認してToDoリストを作成。	●年次研究などに関わる資料の読み込みや執筆。オンラインデータベースや図書室の資料も活用する。 ●分からないことは同僚に相談。草稿を読んでもらうことも。	●ウェビナーを見ながら研究室で昼食。コロナ禍前は同僚と研究について話しながら食事。	●一般課程や特別課程で幹部自衛官などに向けて宇宙安全保障の講義。 ●実務経験に裏打ちされた質問は研究の参考にもなる。	●国際シンポジウムの開催に向けた所内会議。 ●海外招へい者とのメール調整。	●明日のスケジュールを確認して退室。 ●帰りの電車では論文を読んだりウェビナーを視聴。

いとう のぶよし
伊藤 頌文

戦史研究センター国際紛争史研究室研究員

イギリス帝国やヨーロッパを中心に、安全保障に関わる諸問題を歴史的な視座から研究しています。私の主たる関心は地中海地域の国際関係ですが、古来より幾多の勢力の興亡がみられた地域の歴史を眺めることで、現代日本を取り巻く安全保障環境に対しても、様々な形で有益な参照軸を提供できると考えています。

防衛研究所は文官研究者だけでなく自衛官の方々とも日常的に意見交換ができ、通常なかなか得られない「現場感覚」を日々感じられるのは大きな魅力です。また、令和4年度より科研費への応募が可能となり、私の研究課題も若手研究の区分で採択されました。他の研究機関や大学との連携も、今後ますます活発になると思っています。

専門:イギリス外交史・帝国史、
ヨーロッパ国際関係史



AM9:45 始 業	10:15 企画調整課の 業務	PM12:00 昼 食	13:00 企画調整課の 業務	16:30 研究・執筆作業	18:30 終 業
●新着メールに目を通しつつ、1日のタスクを改めて確認。 ●ジャーナルや各種刊行物をチェックし、気になる論文などをピックアップ。読むべきテーマの論考は無限に増える。	●兼務している情報発信調整官の業務。調査研究に関する情報発信の問い合わせや要望に対応し、部内外との調整や所内での取りまとめをおこなう。定期的に開催される研究会やイベントがあれば、その準備や当日の設営なども担当。	●新聞やニュースを見ながら昼食。自分の研究と関わる記事があれば随時メモしておく。	●調整業務の続き。ホームページの更新やSNSへの投稿などを通じて、防衛研究所の研究教育業務を紹介。合間を縫って各種出版物の執筆者とのやり取りや、研究会の参加者の取りまとめ、メールへの返信などを済ませる。	●論文や専門書を読んだり、依頼された論考の原稿を執筆したり、所内での研究を進めたり、その時々で課題も変わる。 ●他の研究者との意見交換も貴重な時間。インプットとアウトプットのバランスが大事。	●帰宅時の電車内では新書や文庫化された古典を読む。自宅では史料の読み込みも。

08 勤務条件・ワークライフバランス

防研の業務の特徴の1つとして、研究や教育の内容は個々の研究者の能力や取り組みに依存する面が大きく、他人によって代替できない仕事が多いことが挙げられます。そのため、研究者の仕事と生活の調和（ワークライフバランス）を確保していくことが非常に重要であると考えています。

また、安全保障課題が複雑化・多様化するなかで、多面的な視点から研究を行う必要性が高まっており、その観点からも女性研究者の活躍は重要といえます。性別に関係なく研究者としてのキャリアを積み、活躍できる環境を整えるため、様々な制度が整備されています。

勤務時間・休暇

- 8:30～17:15または9:30～18:15（7時間45分）フレックスタイム制あり
- 週休2日制
- 年次休暇20日（4月1日採用の場合、採用された年は15日。残日数は20日を限度に翌年へ繰り越し）
- 病気休暇、特別休暇（夏季、結婚、出産、忌引、子の看護等）および介護休暇

フレックスタイム制およびテレワーク

業務に支障のない範囲で毎日の始業時間や終業時間を柔軟に設定できます。特に研究者は、全員が勤務しなければならない時間帯であるコアタイムが事務官などと比べても短く設定されているので、より個人の状況に合わせた勤務形態とすることが可能です。

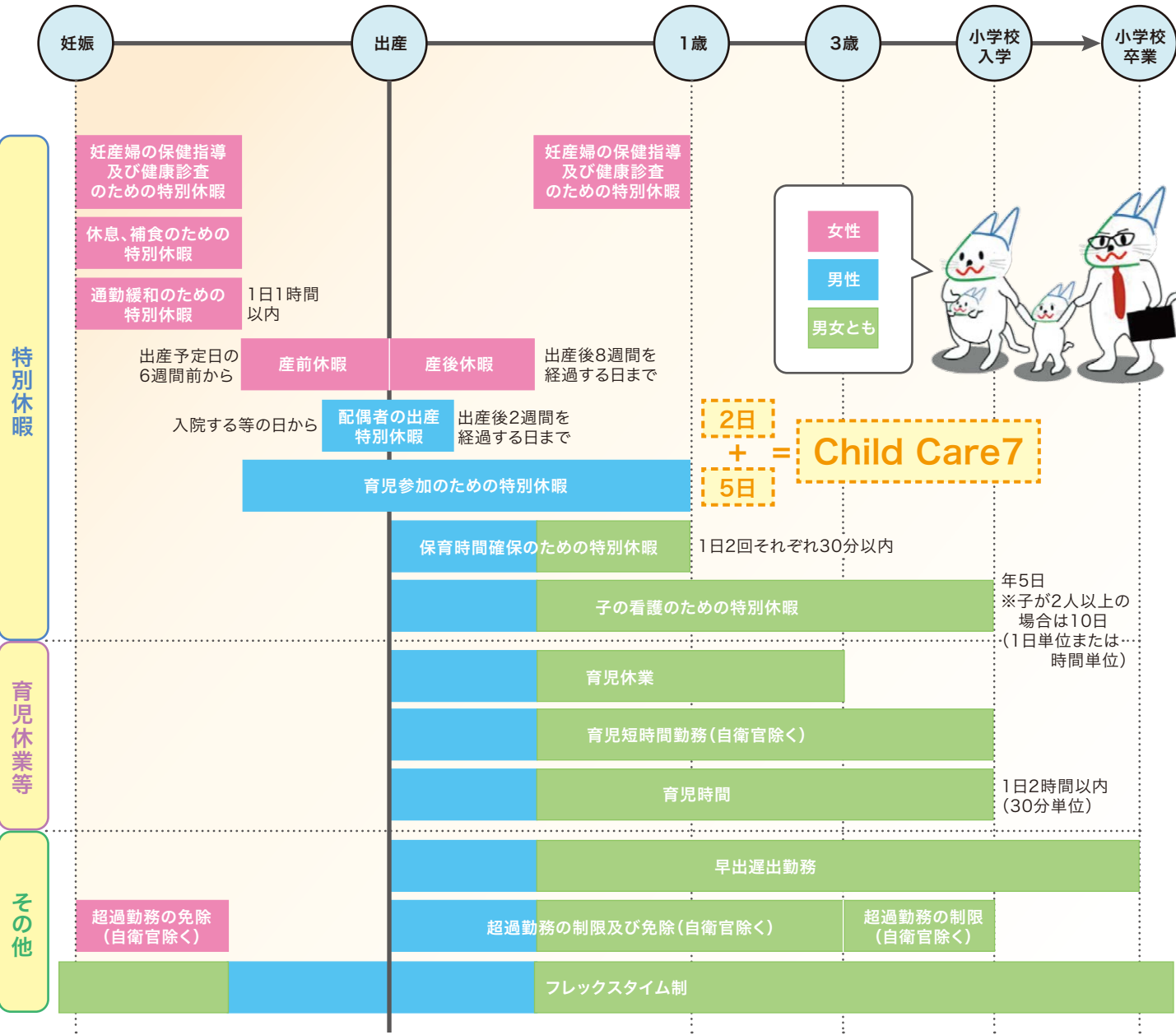
また、所定の手続きと承認を経たうえで業務用端末を持ち帰り、自宅からテレワークすることが可能です。業務に支障がない範囲で認められ、1カ月あたりのテレワーク日数には上限があります。

多くの研究者が、フレックスタイムやテレワークの制度を実際に利用しています。



妊娠・出産～育児の時期における休暇などの制度

妊娠・出産から子どもが小学校を卒業するまでの間の育児期間中には、特別休暇や超過勤務の制限・免除、短時間勤務など、男性・女性職員ともに、仕事と出産や育児などを両立できるようにするための制度を整備しています。



給与・各種手当

国家公務員の研究職俸給表が適用されます。採用募集は研究職2級での募集が基本となっています。具体的な俸給額は、採用時に修了している課程が修士課程か博士課程か、職務履歴があるかなどにより変動します。また、条件に該当する場合に、扶養手当、住居手当、通勤手当、期末・勤勉手当、超過勤務手当などが支給されます。

学 歴	俸 給
大学院修士課程修了	259,320円
大学院博士課程修了	337,680円

いしだ ともり
石田 智範

戦史研究センター国際紛争史研究室主任研究官

防衛研究所という字面からは、ややもすると厳めしくて近寄りたがたい印象を受けるかもしれませんが、けれども、このパンフレットを読まれた方であればお気づきの通り、その実は多彩な背景と問題関心を持つ研究者が集った、一つの知的コミュニティとでも言うべきものです。日本の安全保障への貢献という目的を共有しつつ、日々の刺激の中で互いを高めあうことのできる環境は、研究者として心地よく、また得がたいものであるとも思います。

研究者とはわがままな生き物で、研究スタイルも人によって千差万別ですが、防衛研究所の勤務制度は充実しており、かなり思い切ったライフスタイルも追求できます。あなたも、防衛研究所で個性を磨いてみませんか。

専門:日米韓関係史、
日本政治外交史さわだ ひろと
澤田 寛人

理論研究部社会・経済研究室研究員

私は国際関係における紛争研究に関心があります。端的に言えば、なぜ紛争が起こり、反対にどんな条件の下で平和が維持されやすいのかを研究する分野です。このような問いに答えるため、私はゲーム理論という分析道具を使っています。ゲーム理論は政治現象を説明するうえでとても便利なのですが、日本の国際関係論研究においてゲーム理論を用いた論考を見かけることは多くありません。防衛研究所に応募した際も、「少数派」の研究手法を使っていることについて不安がありましたが、今となっては杞憂だったように思います。ですので、もしみなさんが募集要項をご覧になって「募集枠と自分の専攻があまりマッチしていないな」と思われたとしても、ぜひ積極的に応募していただければと思います。

専門:紛争研究、ゲーム理論の
国際関係論への応用はせがわ たけゆき
長谷川 雄之

地域研究部米欧ロシア研究室研究員

ソ連解体後の現代ロシアにおける執政制度、大統領権力の構築過程について研究しています。普段は、比較法・比較政治・政治史などの先行研究、一次資料（主に連邦法や大統領令、議会資料）を精読するという人文・社会科学領域ではオーソドックスな研究に取り組んでいます。2020年にロシアでは大規模な憲法修正が実施され、自身の研究に大きく影響するとともに、2022年のロシアによるウクライナ軍事侵攻を受けて、他部局及び他省庁職員等との意見交換に加えて、情報発信の機会も多くなりました。一般課程等における教育、防研刊行物の執筆・編集といった業務を通じて、防衛教官としての経験を積むとともに、昨年から科研費の研究チームに参加し、他大学の先生方との研究交流を深めています。

専門:現代ロシア政治・
安全保障やまぐち まさや
山口 昌也

戦史研究センター史料室研究員

現在の研究テーマは、海軍大学校等の将校教育です。史料室には陸海軍に関する多くの一次史料や図書を所蔵しており、歴史研究者として恵まれた環境の中で研究できています。また、私にはアーキビストや学芸員の一面もあり、史料を適切に整理分類・保管して一般閲覧者の利用に供し、所蔵史料の魅力を伝える史料展示にも従事しています。

専門:日本近代史



以下の内容は、4名の若手研究者に職場としての防研について対談していただいた内容を整理・編集したものです。

Q1 防研を志望した理由を聞かせてください。

澤田 田: 防研の研究者に出身大学の先輩が多くいたことで、防研という機関が身近な存在だったことが一つです。また、就職先として意識し始めてから防研を調べてみたところ、任期制ではないことと修士課程修了でも採用してもらえることが大きな魅力でした。私は現在の研究手法に出会ったのが遅く、博士号を取得して大学に就職するにはかなり長い時間がかかると予想していたので、「ここしかない!」と感じたのを覚えています。ですので、いわゆる就活は防研にしかしていないです(笑)。

石田 田: 私、大学院の先輩が防研に多く就職していたことが一つです。在学中に結婚し、子供も生まれるとなった時に、真っ先に頭に浮かんだ就職先が防研でした。共働きで、関東圏外への転出のハードルが高かったことから、防研のロケーションも重要でした。

長谷川 川: 私はロシア地域研究、現代ロシア政治・安全保障を専門としており、博士課程修了後、大学も含めて就職活動をしていました。ちょうどその時に、防研でタイミング良くロシア地域研究の公募が出たので、志望しました。

山口 口: 私は、学部の卒論執筆時から防研の史料室に通っていたので、防研は身近な存在でした。文学部史学科出身の学生にとって、少しでも学んだことを生かそうとすると、大学の教員か博物館学芸員、アーキビストが就職先として想定されます。そんな中で史料室の公募が出たので、受けました。

Q2 防研の研究環境を教えてください。

石田 田: 大学院の研究環境と比べれば、雲泥の差ですね。研究所の施設も築6年とあってピカピカです。

澤田 田: これは人によると思いますが、最初の2年間は、かなり自分の研究時間を確保できるのも魅力です。教育に取られる時間があまりないので、研究に集中できました。シニアになると教育業務も増えていくけど、その前に十分な研究時間を確保できることは大学教員と異なるし、研究者のキャリアとして恵まれていると思います。

また、若手研究者には、もちろん「すぐ行ける」というわけではありませんが、最大2年間の海外留学の機会が与えられることも大きな魅力です。他にも、防研には安全保障分野の研究者が多く在籍しているので、単純に研究者の層がとても厚いです。大学では、これだけ安全保障の研究者がそろっていることはなかなかないと思います。

石田 田: 知りたいことがあれば、誰かしらにすぐ聞けますね。防研には自衛官の研究者も多くいらっしゃるって、軍事の専門知識や現場の実情について知ることができるのも、ならではの魅力です。

山口 口: これは専門分野によりますが、自分の場合は戦史関連の史料にすぐアクセスできることはとても恵まれていると思います。史料室の史料庫に行けば一次史料にアクセスできます。

長谷川 川: 最近では防研が科学研究費補助金取扱規程に規定する研究機関としての指定を受け、防研研究者が科研費に応募できるようになりました。これに伴って、国内の大学との連携、さらには国際的な研究交流が活発になるでしょう。それから部隊研修にも行けるのも魅力の一つ。私たちは1年目に沖縄、横須賀、呉など様々な部隊研修に参加しました。現場の方から部隊運用に関する様々なお話を聞けることは、大学の研究者では得られない経験でしょう。日本最西端の島、与那国島にも研修に行きましたね。

澤田 田: あと、National Instituteの看板はでかい!(笑) 世界的に有名な研究者でも講演などの依頼メールを送れば返事をくれるし、快く防研の研究会やシンポジウムで研究発表をしてくれます。その際、クローズドな研究会も開くので、かなり突っ込んだ議論をすることも可能です。私は理論系の研究に関心がありますが、政策系でもいわゆる大物研究者を招聘できます。招聘した場合には少なくとも2~3日はアテンドしますので、研究者としての貴重な人脈づくりができるし、防研の招聘事業はそういった観点からも魅力的です。

Q3 政府系シンクタンクの特徴について聞かせてください。

澤 田: 入所3年目あたりで本省（防衛政策局）の行政官として働く経験は、ほかの研究機関には絶対ないことですね。私は研究手法が抽象的なので、研究発表の場で「現場を知らないこと」を批判されることがあります。そうした批判に耐えられるようになる意味でも、期間としては短いながらも政策の現場を「見ておいてよかった」と思います。

石 田: 私は外交史畑なので、公開された外交文書を読み、解釈して論文を書いてきました。一度政策の現場に身を置かせてもらったことで、それまでよりも深く、また自信を持って文書を読み込むことができるようになったのではないかと思います。

長谷川: ロシア地域研究者としては、様々な省庁の政策当局の方々と頻繁に意見交換を実施する機会があり、ヨコのつながりが強くなります。2022年のロシアによるウクライナ軍事侵攻を受けて、このような機会は急速に増えましたし、改めてヨコのつながりの重要性を認識しました。

あと、防研の若手研究者は、入所して2年目くらいから、『東アジア戦略概観』や『中国安全保障レポート』の執筆の機会をもらえるので、早くから研究者として能力が試されるし、活躍の場が与えられることは、防研の良い文化だと思います。

Q4 防研のワークライフバランスについて教えてください。

石 田: コロナ前の話ですが、フレックスタイム制を利用して早めに業務を切り上げ、同期で連れ立って神楽坂までよく飲みに行きましたね。酒席で得られるインスピレーションも、研究者にとっては重要です（笑）。

澤 田: 防研は、大学の非常勤講師などの兼業もしやすいですね。あとは、所属している研究者は気さくな人が多いので、コミュニケーションをとりやすいです。若手研究者で自主的な勉強会なんかも開催することがありますし、雰囲気はとても良いと思います。

長谷川: 国家公務員の働き方改革が推進されるなか、テレワークが導入されることによって、介護や子育てなどそれぞれのライフスタイルにあわせて研究活動に専念できるようになりつつありますね。

石 田: 私は第2子が生まれた時、1か月ほど育児休業を取得しました。上司をはじめとても前向きに対応してもらえたので、大切な時期に家庭に集中できました。

山 口: フレックスタイム制も、研究者の場合は、出勤しなければならないコアタイムが事務官よりも短いので、自分に合った柔軟な仕事のやり方ができるのは良いところだと思います。

Q5 防研志望者へ一言お願いします。

澤 田: 私は防研の試験に1回落ちましたが、2回目に採用してもらえました。他にも1回落ちたけど、再度チャレンジして受かった研究者は結構います。だから、たとえ1回落ちても採用される可能性もあるので、是非チャレンジしてほしいと思います。

石 田: そうですね。受験料も掛からないですし、募集区分にもあまりとらわれすぎず、力試しのつもりで受けてほしいです。例年、採用情報は春先に研究所のホームページで公開されますので、ぜひ確認してみてください。まずはフェイスブックやツイッターで防研の公式アカウント（注:裏表紙にQRコードがあります）をフォローしていただければと思います（笑）。

10 よくある質問

Q1 研究者の採用は毎年行っていますか。

A1 大学院修士課程修了見込み以上の方を対象とする採用は、定期的に行っています。最近の採用実績は以下の通りです。

採用年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
人数	2	3	1*	2	3*

※当初の採用予定年度に計上しています。

Q2 修士課程在学中のため、大学院などの授業の課題で提出したレポート以外に研究業績と呼べるものがないのですが、それでも応募可能でしょうか。

A2 可能です。採用プロセスにおいて研究業績審査は、それ以外の語学・専門試験などの試験種目のうちの1つに過ぎません。研究者としての将来性を重視していますので、研究業績が少ないことで不利となることはありません。ぜひ積極的にご応募ください。

Q3 募集案内に書かれている「職務内容」と現在の自分の研究内容が一致していないのですが、応募可能ですか。大学院で理工系の勉強をしていますが、応募はできますか。

A3 はい。採用後は「職務内容」に示される分野での研究に主に従事することになりますので、その分野への学問的関心や研究意欲は必須です。ですが、選考では研究者としての将来性を重視しますので、応募時点で「職務内容」と合致するような研究業績や経歴は必要ありません。採用をきっかけに、その分野の研究に組みたいという強い思いをお持ちの方からのご応募を歓迎します。

Q4 応募票の「資格」について記入例で示されているような資格を持っていないのですが、何を書けばよいのでしょうか。書かないことによって不利になることはありますか。

A4 応募票の「資格」は面接などの際に参考資料として用いるものですので、資格がないというだけで選考上不利になることはありません。また資格について特段の基準などはありません。防研の仕事に少しでも関連ありそうだとご自身で思われる資格でしたらどのようなものでも結構ですので、ぜひご記入ください。

Q5 現在、博士課程に在籍しています。採用後も博士号取得に向けて博士論文の執筆を続けることはできますか。

A5 はい。防研採用後に勤務時間以外の時間などを利用して論文の執筆を着実に続けて、博士号をとった研究者も数多くいます。

Q6 他の研究機関が実施する研究プロジェクトの委員や大学における非常勤講師を引き受けることは可能ですか。

A6 防研の職務に支障がないなど、いくつかの承認基準を満たす場合に行うことが認められています。具体的には採用内定時にご相談下さい。

Q7 防衛研究所で勤務するには英語力はどの程度必要でしょうか。

A7 防衛研究所では、国際会議や研究交流の場で英語が共通言語として使用されることが多く、研究分野を問わず、英語で研究、発表、議論できることが重視されています。また、所内の業務だけでなく、留学や在外研究などへの派遣でも英語力が前提となっています。高度な英語力を養い、維持するためにも、TOEICやTOEFLなどの検定を積極的に受験されることをおすすめします。